

課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学籍番号 16DC1603
氏名（本籍） 陳 石軍（中国）
学位の種類 博士（中国研究）
報告番号 甲 第 126 号
学位授与年月日 2023（令和5）年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
論文題目 谢良佐的理学世界

審査委員

主査 黃 英哲	
副査 三好 章	
副査 木島 史雄	
副査 宇佐美 一博	
副査 橋本 昭典	
副査 福谷 彬	

2023（令和5）年2月14日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本博士論文「謝良佐的理学世界」は上蔡先生こと謝良佐に焦点を当て、北宋末期から南宋前期の理学発展史を主軸とし、謝良佐の生涯と学術全般について考察することにより、理学世界の研究視点から伊川学と朱子学の中間となる上蔡学について論じている。理学研究の多様性を増し、宋明代の理学学術史研究の空白を補填するものである。論文全体で謝良佐の生涯と学術に関する史料を編年によって考察し、矛盾し合う各種史料を細かく整理して誤りを正した。「上蔡謝先生年譜」を作成して付録とし、一理学家の年譜による事例研究を完成させ、論文研究にとっても確かな資料を提供した。本論は序論と結論、附編を除く全六章からなる。第一章「生平与学術(生涯と学術)」では、事細かく謝良佐の生涯とその学術系譜について述べる。第二章「謝良佐与元祐党籍(謝良佐と元祐党籍)」では、謝良佐の生涯の事績—元祐党籍との関連を考証している。謝良佐と元祐党籍との関係だけでなく、同時に元祐党籍と北宋末期の理学との関係を考察する上でも貢献している。第三章「謝良佐与北宋晚期理学(謝良佐と北宋末期の理学)」では、謝良佐の教えが伝授される状況から北宋末期の理学の発展状況を検討している。学術と政治の間の緊張を通して、「伊川学」を中心にしてこの時期の理学の特色を明らかにした。第四章「経学与理学從《論語解》到語錄(『論語解』から語錄に至る経学と理学)」では、第三章で述べた学術と政治の領域における「伊川学」と王安石新学との争いを受けて、王安石新学と二程理学の学術面の交替を経学の面から解説し、それによって謝良佐の『論語解』が両宋の時期に流傳し影響を与えたことを鮮明にした。第五章「《上蔡先生語錄》的編撰与成書(『上蔡先生語錄』の編纂と刊行)」では、『上蔡先生語錄』は謝良佐晩年の講演の記録であり、最もその思想を代表するものであるが、本書は南宋の時代に朱子の編集と削除により定本が作られて一時流行した。南宋に越中書商によって『諸儒鳴道集』七十二巻の中におさめられ、金朝に伝えられると、北方の学者の注目と批評を呼んだ。本章は『上蔡先生語錄』の編纂、刊行を中心に、謝良佐の学術の伝播と影響について全貌を明らかにしている。第六章「近世東亜《上蔡先生語錄》的版本与流傳(近世東アジアにおける『上蔡先生語錄』の版本と流傳)」では、第五章の論述を受け、さらに『上蔡先生語錄』の目録を調査した。中国、日本の図書館を訪ね歩き、現存する『上蔡先生語錄』の単行本には若干の種類があり、明刻本が5種類、清刻本が十数種類、そのほか日本江戸刻本1種、朝鮮李朝写本1種があることを発見した。本章では異なる版本を区別して考証し、最終的に『上蔡語錄』の写本と印刷出版の工程では、王畴、呂留良、張伯行等がテキストを編纂校訂しているが、明代の王畴の写本と清代の『四庫全書』完成の過程で、別々に段落が脱落したと指摘した。これら歴代の版本上の文字の相違は、かつての研究者は朱子によるものとし、『諸儒鳴道』の刊刻年代を判断する証拠とされていたが、それは誤りであるという結果が得られた。本博士論文の資料収集と考証に関しては「讚嘆」のことばで表現するのがふさわしい。特に謝良佐の代表的な著作『上蔡先生語錄』の複雑な版本系統についての詳細な考証と、『論語解』の多種に及ぶ古籍善本の輯佚についての精密な考察は高く評価すべきである。本博士論文は全体の構成が緻密で、論理的かつ弁証的であり、完成度は非常に高い。

全体的に見て本博士論文は以下三点の独自性を備えている。

- 1、謝良佐の個人研究の面で、新たな資料の整理、考証と編年研究を果たした。理学世界では謝良佐その人の生涯についてのみでなく、その生活や学術世界も含め、彼の学問経験、文学の影響、弟子への講義、政治経歴、著作の伝播などをテーマに詳しく研究している。謝良佐は北宋、南宋の理学が交代する中間に位置する人物であり、北宋五子学術の代表者で

もあり、詳細な研究がなされるべきであるが、この研究の難点は史料が乏しく混乱している点にある。靖康の変がもたらした北宋の滅亡により、謝良佐や北宋末期に関する歴史資料は甚大な被害にあった。各種の記述は矛盾し合い、はつきりしない状況にある。本論では、宋人文集、宋代史料の関連する記載を調査、比較し、『宋史·道学伝』、周汝登『聖学宗伝』、黄宗羲『宋元学案』等の代表的史料の誤りを一つ一つ検証し、謝良佐の生没、本籍、家系、門人、交遊に関する史料を十分に得られたところで結論を提示している。これが一つ目である。

2、学術と政治の研究では、本論文は北宋末期の理学発展と政治変化の複雑な関係を明らかにしている。「謝良佐と元祐党籍」「謝良佐と北宋末期理学」等の章では、宋徽宗の執政時期の新旧党争の対立、官学と私学の対立に着目し、謝良佐の不安定な政治生涯に目を向け、北宋末期の政治世界を考察している。宋徽宗は神宗、哲宗の政治遺産を継承したが、これは徽宗の独立執政後、「神宗故事」にならった変法の推進を促した。本論では、謝良佐は建中靖国、崇寧年間に書局官に選ばれ、宰執の韓侂胄に認められて『神宗実録』の編修に直接参与したこと、徽宗初期の政治変革に巻き込まれることになったと指摘する。宋徽宗と新任宰執の蔡京が罪に陥れた「元祐党籍」は、これまでの研究では北宋末期の政治史の焦点であるが、本論では謝良佐に注目して、元祐党籍の形成と発展過程を改めて考察した。朱震、李憲、呂祖謙、朱熹、黃以周、謝伋等の見解を折衷して誤りを正し、元祐党籍中の理学家が政治に参与する過程を見直した。論文はさらに、政治の場で不遇となった理学家らの学術は、蔡京の崇寧新政が推行した学校制度では私学として排斥され、北宋末期では「相伝」の形でのみ伝えることができたが、これにより伊川学と上蔡学の学術伝承がなされたと提議し、北宋末期の理学形態を変化させた政治的力を明らかにした。哲学史と概念の形成と変化に着目した内的論理の力から言うと、本論は北宋の理学発展についての新たな力を提議している。これが2つ目の独自性である。

3、歴史の面から、本論は謝良佐の著作の伝播史に着目し、上蔡学と朱子学の継承関係を論じている。一方で、謝良佐の代表的著作『論語解』と『上蔡先生語録』の二冊を比較し、前者の影響力が後者よりも弱いことから、この二冊の理学発展における異なる機能について論証している。経解は主に士人が科挙に参加するためのテキストの知識を提供するものであり、語録は生活の場に近いという点で、直接学者の心と体の問題に答え得るものである。著述形式から言うと、謝良佐の学術は経学から理学への発展過程を経ており、理学勃興の時代のテーマも反映している。一方で、論文の第五章、第六章では『上蔡先生語録』の編纂と刊刻、流傳の問題を細かく考察している。胡安国、曾恬、朱熹等が『上蔡先生語録』を編纂した過程を見直すことで、本論では江民表の『弁道録』が誤って『上蔡先生語録』に収められた過程を解釈するだけでなく、胡適、荒木見悟等の先学の研究における疑惑にも解答している。朱熹や胡憲、李侗が『上蔡先生語録』を学ぶ過程を通して朱子学と上蔡学の継承関係の問題を明らかにし、上蔡学の朱子学に対する直接的影響について指摘し、道南学派(二程-楊時-羅従彦-李侗)以外の別の流れからの理学発展の手がかりを明らかにした。この他に本論文は、明清及び朝鮮、日本の『上蔡先生語録』の刊行では、いずれも朱子学を理解するためのものとして上蔡学に視点が置かれており、朱子学のおかげでかえって上蔡学が近世東アジアに伝わることができたと提議している。二冊の書籍の伝播史を研究することで、本論文は上蔡学、朱子学の相互関係について全面的に斬新な見方を打ち出し、謝良佐と朱熹の学術関係に関する学術史の難題を解き明かした。これが3つ目の独自性である。

本博士論文で特に評価に値するところは以下の三点にある。

1、理学研究の学術視野を拡大させた。既存の宋代理学史の研究では、主に理学が北宋中期に起こり、南宋中期に完成したことに注目しており、北宋末期についての研究は特に少な

く、抽象的な哲学理論を論じるものが主である。これは関連史料が不完全で混乱しているせいであり、また北宋末期の理學が複雑な様子を呈しているためである。この時期の理學世界は政治と学術の領域理論が交錯しており、官学と私学の競り合いのなかで理學は発展の場を得た。理學世界の研究視野を打ち立てることで、本論は北宋中期・末期の理學史研究を補強している。

2、研究方法において、思想研究、歴史研究、文献研究の融合を実現した。『上蔡先生語錄』は早期理學の代表的な語錄であるが、その本の成立と編纂は北宋末期、南宋初期の長い時間を経ており、謝良佐、胡安国、曾恬、朱熹等の講述者、記録者、編纂者の解釈の主体性が貫かれており、抄録の過程で誤って収められた『弁道錄』等の内容は理學と仏教学の関係に関わる。明代の学者周汝登から近代の学者胡適をはじめ日本人研究者荒木見悟らは『上蔡先生語錄』のテキストに疑問を呈しているが、いまだに相応の解答が出されていない。本論は中国、日本等東アジアの多くの図書館の『上蔡先生語錄』の古籍版本を集め、さらに方志、古籍目録等から可能な限り亡佚した版本の情報を収集した。系統的、全面的に『上蔡先生語錄』の構成、テキストの派生を整理し、文献の版本の研究方法によって思想史の問題に答えを示した。

3、学術貢献の面では、学界の参考とし得る『上蔡謝先生年譜』を完成した。年譜は理学家の学業を研究する重要な資料であるため、従来より学者に重視され、理学家の没後、その行状、墓志銘を根拠にして、門人や後継ぎによって相応の年表、年譜が作られる。程顥、程頤、楊時、游酢、尹焞、朱熹、王守仁等の理学家には数種の年譜があるが、謝良佐だけは今まで至るまで年譜がなかった。宋人文集、各地方志、宋代史書や歴代序跋等の基礎史料から年代を比べて異同を照合し、謝良佐の生没年、家族世系、科挙、仕官、求学、講義、交遊、芸術、祠祀等について全方面から考察を進め、信頼と参考に足る年譜を完成した。『宋史·道学伝』の簡略で脱落した部分を是正するため、新たに謝良佐の小伝を執筆し、今後の理学研究に重要な史料を学界に提供した。

口頭試問は2023年1月16日午後2時00分から質疑応答を含めて4時までオンラインで行なわれ、陳石軍氏本人と審査委員として主査の黄、副査の三好、宇佐美、木島、福谷、橋本の6名が参加した。試問終了後、引き続いて4時10分まで審査委員によって審査会議を行なった。試問の冒頭に、まず本人による同論文の内容説明(PPT使用)を行なったのちに質疑応答を行なった。質疑応答の中では、審査委員から主として以下の各項について指摘があった。

- ・本博士論文は主に人物を手がかりとして、論文題目にある所謂「理學世界」の具体的な内容についてよく説明しているが、さらに「理學」と道教・仏教学思想の発展における交渉関係についてもう少し説明があると望ましい。
- ・謝良佐の經書解釈は『論語』のみだが、王安石の『周官』、朱熹の『儀礼』など、宋代学者にも經書解釈書は存在する。謝良佐の業績は、それらの經書解釈の中でどのような位置付けにあるのかもう少し説明があると望ましい。
- ・朱熹『四書集注』に、「謝氏曰」が48条引かれているが、48条を具体的に分析すると、謝良佐の解釈にどのような特徴が見られるか。またこれらの特徴は程子や同時代の諸子と比べて何か違いがあるのか。朱熹の思想との関連はどうなのか。
- ・本論19ページの注1で「述而第七·子在齊聞韶」の謝良佐注「程侍講以三月為音字」を引用し、これは「謝良佐の王安石父子の新經学に対する理解度を示している」としているが、引用の状況からみると、両者の影響関係に基づくとは考えにくい。例えば、「三月」を「音」とする

のは程頤特有の見方であり、謝良佐が自分の注釈にこの見解を記したのは、新奇な解釈を保存するためだったかもしれない。この問題に対してどう説明するか。

・72 ページ「胡安国の『春秋』学は明らかに謝良佐と直接的な関係を持っている」、75 ページ「これがまさに謝良佐、胡安国が授受した問題の複雑なところである。」の部分について、『程氏外書』(『二程集』中華書局 433 頁)には、「昔劉質夫作《春秋傳》，未成。……昔又有蜀人謝湜……解《春秋》成，來呈伊川。伊川曰：“更二十年后，子方可作。”謝久从伊川學，其傳竟不曾敢出。」とあり、『春秋』の解釈がすでに複雑で難しかった状況を説明している。胡安国の春秋学と謝良佐の関係について、もう少し詳しい説明を望む。

・本論 92 ページ「晁公武『郡齋讀書志』の記述」、98 ページ「宣和三年から干道八年までの両宋のこの六十余年の間、まさに謝良佐の『論語解』が王安石と朱熹の間の空白を橋渡しした。」の部分について、晁公武(1105-1180)は王安石、王雱、陳祥道の3人が『論語』を注釈した当時の状況について叙述しているが、なかでも特に後世に流傳した陳祥道『論語全解』は、宣和三年から干道八年(1121-1172)のこの時期にはどのような位置づけにあったのか。

・元祐党籍の全体像に対する分析がもう少し欲しい。

・本論第二章「謝良佐与北宋晚期理学」の結論部では、謝良佐は崇寧元年に「元祐党籍」に入れられ、崇寧二年の第二回目の「元祐党籍碑」からは党籍から出たとしているが、これほど短い間に党籍から外されたのはどのような原因が考えられるか。

・謝良佐思想の新しい側面をもっと明らかにして、謝良佐の思想史上の位置づけについてもっと明確してほしい。

陳石軍氏はすべての質問に具体的に答え、審査委員全員が誠実な印象をもった。審査委員会において検討の結果、陳石軍の課程博士論文『謝良佐的理学世界』は、これまで専論が少なかった謝良佐について、現存する資料を最大限に使い、その経歴を詳細かつ厳密に再構成し、その成果にもとづいて理学の学問的系譜、謝良佐の正確な位置づけを行なったものであり、研究の独自性及び評価に値する部分を十分に備えている。また、資料の使用は厳密であり、「本論文の執筆は思想、概念、学説に重点を置くのではなく、論理構造の分類整理にある」とし、「生涯と学術変遷の軌跡」「学術環境学、学術交流」から考察を行なう方法論も成功しており、そこから得られた結論は十分に首肯できるものである。思想的な分析については、陳來『宋明理学』等の先行研究に十分な蓄積があることを指摘するのみであるが、これらを本論の立場から再検討すれば、一層、本論の妥当性を示すのに有益であると思われ、今後の研究の発展が期待される。

以上の理由によって、審査委員会は本論文を博士学位論文として十分な資格があるものと認める。

以上